

光明 第五巻第六号

連日曇

毎日毎夜雨が降ります。雲は低くたれて薄暗い日が続きます。もう何日も太陽を拝みませぬ。太陽を拝まぬということは太陽が出ていないということではありません。

攝取心光常照護、已能雖破無明闇。

貪愛瞋憎之雲霧、常蔽真實信心天。

譬如日光覆雲霧、雲霧之下明無闇。

「攝取の心光は常に照護したまう。已に能く無明の闇を破すと雖も、貪愛瞋憎の雲霧、常に真實信心の天を覆へり。譬へば日光の雲霧に覆はるれども雲霧の下明かにして闇なきが如し。」

私の自性は晴れることなき、貪愛瞋憎の雲の下にすすり泣いています。けれども太陽は登っています。やっぱり昼であります。

如何に雲霧深くむらがるとも、心光照護の昼を忘れてはなりません。み救いは、あの三毒の雲霧がめあてです。煩惱の自性そのままを取って仏にしよう。如来願心が、雨降りの続くにつけても味あわれめます。

煩惱の今日一日を送らねばならぬことは耐えがたい苦しきでありますけれど、如来本願のお目あてが、その苦しむ私であることに気づく時、そのままに又、涙ぐましくなります。

人々はやっぱり連日の雨をかこちながら暮しています。(大野支部にて)

法難

突出す力

「教員タルモノハ常ニ寛厚ノ量ヲ養ヒ、中正ノ見ヲ持シ、就中政治宗教上ニ渉リ執拗矯激ノ言論ヲナス等ノコトアルヘカラス」

冷たき九寸五分は三方の上へのせられて我が前に置かれてある。

「教職にいたれば、念仏の宣伝をやめよ！」

光明団を続けるならば、教職を去れよ！」

九寸五分をとつて見事腹を切つてみ光のために生きようか？

光明団を瓦壊して静かにして平安なる教育界にしようか？

村の一部落に忽然として少数の社会意志を代表する一青年は村当局に迫った。

苦しい村当局を救うために、一週間の暇を願つて帰つて来た。

誰もいない日暮れ近い音楽室に入って椅子にもたれてじつと深く考えに沈む。仰いで天井を見るともなしに見つむれば、笑った悪魔の顔のような模様が見える。雨漏りのために出来たシミである。

尊い菩薩のような像、花、雲、死人の顔……種々なる思いがそれについて湧く。淋しいく、心が、灰色な空のように、深い山奥に一人入ったように続く。

「人生は孤独だ」

たった一人なのだ。最後という時、たった一人なのだ。

「どちらを行こうか」

どちらかを選んで進まねばならぬ。この人生の岐路に立った時、人はいちばん、たった一人だということ深く体験する。

誰が定めようもないではないか。もし人間が、寄せかけく迫って来る人間苦をい加減にごまかさずに、まともに見つめて行くなれば、もつと人生の本当を知ることが出来る。

そうだ。苦はある意味において人間に与えられた尊い宝なのだ。苦の取り扱い一つで、豚にもなれば親鸞にもなるのだ。

精神生活を忘れた人たちは、この宝を惜し気もなく棄てているのだ。

「教職を棄てようか」

無限の執着が湧いて来る。この生活のために十五年を費して来た。

そうして、この道を行けば（もちろん光明を棄てて）平安な、呑気な一生涯かも知れぬ。

教育界で雄飛する。ちよつと十年前、今將に教育界に出るといふ頃の若い功名に憧れる自分を見出した。

教職を棄てる、自分の生活の革命である。かねて覚悟していたことではないか。それが今来たのだ。

子供。子供。子供の顔が一度に見える。先生々々とさわぎたてる教室の様が。皆桃色の心を持ち、桃色の声を出し、桃色の世界に住み、桃色に笑う子供が一斉に私の心をひつ捕えてしまう。

どうして彼等を捨てて去られようぞ。

無限の愛執が湧いて、うるんだ心になる。思わず涙は床板に落ちる。

この学校を去る。

満七年間、学校の隅々の木までが皆私のものであった。四年前に郷里から持つて来て挿した箸くらいなポプラはもう三間にもなっている。一生涯を捧げようとした学校の全てはほとんど僕の手を要している。それを今捨てるのか。

光明団を捨てようか。そして、念仏を教壇の上に生かす。それが本当の念仏行者の生き方ではないか。

それに私は何故に名利に人師をこのむのだ。小慈小悲もなき身ではないか。「牛ぬす人とは見ゆるとも後世者、仏法者とは見られぬ」と教えられているではないか。

たった一人永久に静かに彼の桃色な子供の純な鮮かな生命の音波を念仏のこの胸に受けて生きようか。

それに俺はパンの資を失うではないか。忙しい生活を棄てて、本当の人間らしいゆとりのある生活、午後二時には授業がすむ、三時まで事務をとる。そして平和な家庭にかえって読書する。平安な生活ではないか。

何！ 何！ 何！

汝は平安な生活なら、どんなに生命のない生活でも、去勢された生活でも、妥協の生活でもいいのか。

汝は、平安な生涯を求めて、言いわけをつくろうとしているではないか。

「パンがなければ生きてゆけぬと？」

それがお前の本当の声だったのか！」

おゝ。おゝ。

「お前が生れて出た時、

生れる先に、お母校の懐には温い乳が用意されてあつた。

大空と太陽と緑の大地とが用意されてあつたではないか。

それから二十九年間、

生きねばならぬ生命の前に、食うことを拒まれた一日の飢さえあつたか。

生きねばならぬ間、食わされてある。

食わされる間、生かされる。

生かされる間、食わされる。」

それがお前の信念ではないか。

善と悪。平和と荒波。

物質と生命。子供と同胞。

魂の破産か！

世界がクルクル廻る。

何も見えぬ。何も考えられぬ、何もわからぬ。

我が魂は、体をはなれて高くくまい上るのか。

……

夢か……

現か！……

お前はお前を信じて下さつた一人、
たつた一人の淋しい魂を持った同胞の胸に信じられたお前までが、
その感じ易い胸に、

妥協とソロバンの外知らぬ万人にもまさる
人の世の宝玉のような、その若人の胸に、

お前までが焼ごてを当てて、人一人殺すのか。……

……

夢か！ 現か！

おお、み仏様。このたつた一人の私に、今も現に、この私を見て泣いていて下さる。
南無阿弥陀仏。くく。

善も欲しからず。悪もおそれなし。

全ての情実、批判、理論、そんなことの全て間にあわぬ生命のみの跳り、ほとぼしり、不退に生きんと燃える、つき出す力。

突然、

「生きよ！ 突破せよ！ 大死！」

町の裏には淋しい魂がふるえながら、永遠の生命を得たさに震えているではないか！

山の奥の若人は、真実をくくと、

学問よりも教よりも名前よりも、もつと高値な何かを得たいと、

青白く痩せているではないか！

死より忙しいことがあるか！

仏のみ胸に誕生するほど大きなことがあるか！

立てよ！

何でもふるい落して、猛進せよ！」

そうだ。私は自由を願う。

この煩惱の中から飛び出す力、その力の権威をどうすることも出来ない。学校を去る。

自由に如来の大悲を叫ぶのだ。

それが善か、それが悪か、そんなことを問うほど心の隙はない。

弥陀の本願力によつて、

全ての苦悩を突き抜けて、突き破つて、

野こえ、山こえ、三悪道を越えて、

安養浄土に生まれることの出来る不退の魂の前には、

その行くところ、諸神諸仏は我を守り、鬼神は首をたれて尊敬する。

魂の底からふき出す力、

自然にほとぼしり出る、どうすることも出来ぬ絶対命令。

「念仏と共に自由に生きよ！」

学校をやめるのだ。

もう一週間の後に返事すればいい。

何等の重荷も苦痛もない心で音楽室を出た。

私はこの学校を去るのだ。

さつき五時すぎであった時計は六時すぎになっていた。(六月十五日)

魔風秋風

私は目的に向つて行動を急いだ。

「教職を棄てるのはあまりに惜しいではないか。一時光明団をやめて、せめてもう数年したら恩給がつく、それからでもおそくはない。」

私にとつては早いも遅いもない、ソロバンを取る時にのみ、早いと遅いがある。

「あのようによこされたら光明団ももう終わりだぞ。団員だと言つても一時湧いただけで本当に信仰に入つた者は少いぞ。」

何という悪魔の誘惑だ。

それならこそ、いよいよやらねばならぬ。かく言うその人こそ、一時騒ぎであつたのだ。

私は、あの谷々の若い念仏の尊い兄弟の涙を信ずる。

種々の流言が妖精のように村を過ぎると、信仰なき凡愚の徒が、秋の野の尾花のように迷い騒ぐ。

我が魂のみ常に緊張して、如来大悲をいよいよ嬉しく楽しく仰ぎ奉る。

野卑なる、反対の為に反対をなす徒輩、あるいは、検事の入村など根もなき風評を放ち、村内各所に張紙をなす等、暴力をふるつて人民を煽動す。

浮薄なる無信仰の徒、手段にのせられて動揺す。

余一人、法難に坐して、いよいよ如来大悲を信ずる者の力を知る。

運動は功を奏して、彼等の手より、官庁の手に移る。

されど我はずでに、根本を解決して、大安心に住む。

鈴張支部大元仙林法兄、熱言もつて我を励まし、特に雑誌『希望』を贈る。

「霜の降る時、強いて自然にさからつて芽を出す枝を延すなよ、左に大きい岩があるならば右に廻れ、前につかえたら後に延びよ。人生にも吹雪がある。枝を折られ、葉を落され、死せるが如き淋しい姿を現わさねばならぬ嚴冬の日がある。かゝる時こそ自己の内的生命を静かにく育つべき絶好の機会である。葉が落ちても悲しむな！ 土の下には生れたばかりの赤ん坊がふるえている。落葉は蕾の精のお布団だ！ 葉が朽ちても悲しむな！ 土の下には生れたばかりの赤ん坊がお腹が空いて泣いている。落葉から蕾の精のお乳が出る。」

生れた赤ん坊ももう五歳になつた。ことさらに波乱を起さんがために、破壊せんがために暴力をふるう彼等の手で、盛んなる者を嫉む俗悪なる彼等の手で、女よりも小心なる彼等の手で、五歳になつた念仏の子を殺すことが出来るか。

力

「異安心。」

半自力半他力、

疑心往生。」

曰く、

「キリスト教の宣伝者。」

私はことごとく皆、言い訳をしない。

ただ、怖ろしき者は去れ。

往生は、光明団によつて定まるのではない。濟世軍によつてでもなく、寺院の説教によつてでもない。

ただ弥陀の本願力によるのである。

仰げただ、弥陀の本願力。

信ぜよ、弥陀の招喚の勅命を。

信仰は一兔毛うのげのはからいをゆるさぬ。

宗教ははからいにかためたものではない。

言を捕らえて攻撃の材料を得んとするならば、如何なる人にもあるであろう。

犬は遠く吼えて、しかも、正々堂々来たるを得ない。

もし正義の士、ほんとうのみ仏の子ならば、何故に言をつくして教えてくれないのだろう。

我は弥陀の本願力に乗托して一道を歩むのみ。

「君が今、せつかくの教職を棄ててあらゆる苦戦をしても、団員がついてゆくか否かはわからないぞ。光明団のためとて、教職は棄てた、光明団はふるわず、その時君はどうする。まあ、悪いことは言わぬ、教職にいたまえ。」

御親切は有り難い。私の決心を外にしてほんとうに有り難い。

けれどもたつた一人だ。

「たつた一人」これほどなつかしい言葉はない。

「愛は、この孤独から生れる。」

私は私の生命の一道を歩めばいい。

一緒に歩む方々が多いのを望みもせぬ。

けれども人一人の歩みが真実であるならば、それは常に万人の道の開拓であつた。

私はただ一道をにらむ。

私は途中で斃れるかも知れぬ。

誰でもいい、私の屍を越えて行かねばならぬ。

と言つて私はただ、聖親鸞のみ後を追うて行かしてもらうだけだ。

「平凡人の生活は楽しい家庭の内にある。

偉人の生活は悲惨なる孤独の内に生れる。

平凡人は楽しまんがために生れている。

偉人は苦しまんがために生れている。

十字架を負わんがために生きている。

愛に生ける革命家は何時も孤独であつた。

人類を愛した革命家は人類の刃に斃れた。

古来彼等は彼等の恩人を敵として滅ぼした。

第一の鐘を打つ者は常に兄弟の呪詛を浴びせかけられた。

絶望のなき所に希望なく、哀傷のなき所に法悦はない。

罪のなきところに義なく、暗のなきところに光はない。」

私の手帳には何からとつたか、何時書いたか、こう書いてある。私はもちろん凡人である。家庭の楽しい生活を思う。けれども苦しい生活にも堪え得る自信をもつ。

偉人でなくて凡人である我は、歴史の上に燦として輝く偉人たちの殉教をまねるほどの馬鹿ではない。

けれども、多くの偉人の血は永久に地上に流れているを思う時、限りなく鼓舞せられ、激励せられる。

私は間もない内に教職を捨てる。

たつた一時間にして解決し得た。

何という小さい試練だ！

何という小さい試練だ！

その昔、吉水教団の血の色を思う。

法然上人、親鸞聖人の如き念仏に生きたまう方々が中心にいられてさえ、教団は木葉微塵にくだかれた。宮中の女官、松虫鈴虫を出家せしめた時、女をたぶらかす悪魔の集団として惨めな悪評の的となつたであろう。

大正の聖代、帝国憲法は、安寧秩序をさまたげず、臣民たるの義務に背かざる限りに於いて、信教の自由を認め、言論、著作、集会、結社の自由を許す。

ただいたずらに嫉み、憎む徒輩のなすべき手段は、人身攻撃と、異安心呼ばわりの二途あるのみ。以つて未決定、凡愚の徒を誘うべきも、信心決定せる不退の行者を動かすことが出来ようか。

たつた一つ信仰をもつて

自由人！

私の胸は、洋々たる大海を望むが如くである。

未だ、食うべき職さえ見出せぬ。

ただ信仰一つをもつて、都会へでも、田舎へでも、行きたいままに流れて行く。

念仏たつた一つ持つて、

信仰たつた一つ持つて、

私には、誇るべき学位がない。

私には、示すべき学問がない。

たつた一つの信仰を持つて街に出る。

もし学者でないが故に、共に極楽往生の伴侶たることを嫌がる智者があるなれば、かかる智者をさけて、一文不知のおばあ様と一諸に如来の恩徳を讃仰しよう。

学問もしたい。

けれども私にとつては学問は遊戯である。

一生涯の趣味として遊戯として学問もしよう。

弥陀の光をぬきにしては私には何もない。

念仏以外の全ての営みは、なくてはならぬけれども、第二義であるから。

洋々たる、旭の東天に輝く大洋。

静かに合掌すれば、煩惱、苦患を突破して、如来と共なる満腔に充ちたまう法悦、ただ念仏となつて出づ。出で行かんかな。念仏と共に。

情にかえる

さわさりながら、我も人間の情にかえる時、可愛いのは子供である。おん身たちは不幸の子よ。

何時までもく育ててあげたいと思つたのに。

心を鬼にしておん身たちと別れねばならぬ。

親はなくとも子供は育つ。

ましてや、怠惰なる、無能なる我について学ぶよりも、勝れたる師について教える者が幸かも知れぬ。

けれども我は愚なるにもせよ、君たちが可愛いかった。

その君たちと別れて出て行かねばならぬことは堪え難い苦である。

君等を思うて、どこでか泣いていよう。

大きく育つてくれ。健全に育つてくれ。

お父様やお母様からみ仏様のことを聞いてくれ。

先生は、皆のような時には、おかしいほどのみ仏様の子であつた。

若い芽生に霜が降るな。

霜が降つたら若芽が枯れる。

温い縁にふれてのみ、若葉が育つ。

汚いこの一室

コの字型になつた校舎の西南隅の一室、たつた八畳のこの一室。

雨ざらしになつた板戸が六枚立つてあるこの一室。

床には、白紙で貼られたビール箱を積み重ねた本箱が私の好きな本で充ちている。

机が南のガラス窓に向けて置いてある。

この粗末な一室は、私の書齋であつた。

寝室でもあつた。食堂でもあつた。

私は六年間この室で暮した。

読んだのもここである。書いたのもここである。

訪ね来られし法兄法姉と法悦にむせんだのもここである。

この室は私を今日まで育てた尊い道場であつた。

俗界を離れた田の中の一室、時には十日も二十日も出ないでいたこともあつた。

前に開けた田の緑と、向うに立つ森山とは、私の毎日の友であつた。

森山は、三百六十五日、毎日々々新しい装いをして私をなぐさめた。

原稿書く手の疲れた時、頭をあげて森山を見れば、薄紫な冬の梢の色は、何時とは

なしに水色、黄色、紅色、緑に変わつて行つていく。

森山よ。お前は、沈黙せる友であつた。

けれども一度だって、我を失望させたこともない友であつた。
お前は、春夏、秋冬、永久に日々装いをかえ、雨に、霧に、靄に、雪に、無言に立つていることだろう。

そうしてそれを見る私は、近い内ここを去るのだ。

粗末なるこの室でも、一生の重大な時を比較的有意義に過させてくれたこの室^{へや}、「あの頃」の言葉を使つて過ぎし昔を追想せねばならぬ時、この室はきつと私の眼底に浮んで来よう。
さらばよこの室。

往生の夕べまで

かくて余は、見事九寸五分を取つて教職に死して念仏に生く。

光明団生れて五年、ここに血の歴史をつくる。

いたずらなる言葉をさけて、ただ進もう。

黙々として生命の一実道に精進すれば、苦しむも可なり、斃れるも好し。

同胞諸兄弟！

余は、往生の夕べまで、この毎月の音信を書いて、諸兄弟の机の上に捧げねばならぬ。秋風一度吹いて、惰眠をさます。

法難に坐してそぞろに身のひきしまるをおぼえる。

幸なる哉、五周年にしてこの光輝ある歴史の一頁を作る。

ただ念仏

事おこつてここに約一ヶ月、その間、本団員諸兄弟の活動を見るに、暴力に報ゆるに暴力をもつてしなかつた。

法難に会つて益々法義相続した。

「連盟して官庁への運動

団結して報復運動をせよ。」

けれどもそれよりもつと魂は忙しい問題を見つめていた。

歩武堂々ただ白道の歩みをつづけた。

そうして事は静かに、穏かに、運んで行く。

私たちの前におかれた問題はあまりに大きい。

全ての理論と、妥協、生温さを廃して、ただ進まねばならぬ。

悲惨なる社会のどん底に、変な文化の中毒に魂を見失つた社会のどん底に、そこに精神的革命を願つていたましい同胞が、何かを求めている。

私たちの行くべき道、行かされる道、それははつきり見える。

行かん哉。進まん哉。

悩みもした、苦しみもした、泣きもし、泣かされもした。

けれど、念仏しよう。

ただ念仏しよう。

そこにはもう何も無い。

「となふれば うらみくやみの雲はれて、胸には残る信心の月」(蓮如上人)

決定(2)

人は家があれば家に縛られます。田があれば田に、金があれば金に、親があれば親に、子があれば子に、妻があれば妻に、夫があれば夫に、学問があれば学問に、主義があれば主義に、思想があれば思想に、兄弟も、友人も、牛も馬も、犬も猫も、地位も名誉も、一切私の周囲を有形無形にとりまく全てのものは、一つとして私を縛らぬものはありません。

だからこの縛られていることからのがれることを教えないものは、何もかも、「そらごとたわごと」の仲間であります。言いかえると、念仏をぬきにしたなら何事も迷いではありません。

なんぼ、朝から晩まで働くことを教えても、又それを実行して汗まみれになって暗い内から暗くなるまで働いても、それは自分の欲得から出ることで、やはり迷った者の迷事にすぎませぬ。学問してもそれは迷いの縛りを多くしたので、そらごとたわごとの一つであります。

人間はこの自分を縛りあげることしか考えませぬ。自分を縛りあげる綱を毎日作っては自分をしばっています。家、田、金、親子、妻、夫、学問、主義、思想、兄弟、友人、牛、馬、犬、猫、地位、名誉、衣服、食物、……………

それらの全てが私の魂をしばりあげる綱であります。この魂をしばりあげる綱について研究し、宣伝し、実行している一切もまた迷いであります。

阿弥陀如来は、この迷いの綱を切つて、今度の往生においては、何にも縛られない仏にしてやろうと仰せられます。だから念仏を外にしては私は何にも何の力も認めませぬ。

世の中は随分とこみ入つて来ましたが、こみ入つて来たということは価値が出て来たということではありません。人間の少ないずっと昔は、山に行つて山の幸を、海に行つて海の幸を得て、それで暮して行けたのです。その内に人間が増えて来ると、田を作つたり畑を耕したりして来ました。そして仕事が段々と別れて、漁師の魚と百姓の米をとりかえていました。それでは面倒だから、貝を拾つてお金にしたり、皮を切つて銭にしています。それがとうとう今日のお金にかわつて来たと言われます。お金なども無くすめばその方が結構です。

あんなものを造らねばならなくなって来たのは、人間が増えて面倒になったからです。今となつては使わずに暮すことは出来ないから、お金を得るために働かねばならなくなつて来ました。

歩いていた。馬に乗る。馬車に乗る。進んで汽車、自動車、電車と、だんだんに、早く体を運ぶことが考えられます。けれども今の私たちは、それをあたりまえに思い、まだその遅いのをやかましく言いたい気にさえなります。又見方を変えてみれば、要するに忙しくなつて来たのです。活動が烈しくなつて来たのです。そうしてそれが人間の幸福ということには更に力になつていません。

如何に学問が進んでも、自動車がこの村でさえ毎日五十台数え得るようになっても、情の世界にはちつとも変化はありません。人間の涙の数は一滴も減つてはいません。苦はちつとも少くなつていません。かえつて苦悩は増しているかも知れません。情の世界だけは、博士でも乞食でも長者でも一文不知の姥でも同じです。子が死んだら誰でも泣きます。

東本願寺法主句仏上人

「幾度か我、我が娘、政子の死を言う。我は政子の父なるものを。許させ給へ……………」

「政子の呼吸は漸次切迫して、その花顔は……………人は政子を美しと言えり。我、如何ばかり之を喜びしぞ……………見るに忍びざるまで凋落せり。かつては父よと呼びしその朱唇も、ただわけもなくおののくのみ。呼び馴れし我が名も呼ばでおののくは。ああ、政子もついに見得たるか。父と住むべき彼の国をと、我も流石に泣きにしが……………」(法悦の一憶)

上人の人間のなる、読む者も、自ら涙が出ます。

貴賤貧富によつて情にかりがないように、昔悲しかつたことは今も悲しく、昔うれしかつたことは今でも嬉しい、情そのものは古今通じて同じであります。

それはそのはずで、簡単が複雑になつたとて、それはやつぱり迷いを複雑にし、迷いに迷いを加えただけです。人間が少ない時は、小作争議も労働運動もないし、社会学などを学ぶ必要はないのです。

学問すれば何でもわかつたように思う人など哀れなものです。いくら心理学が研究されても「会つて別れがなげにやよい」という愛別離苦にはビタ一文の関係はありません。

要するに念仏を離れたら一切のことは「そらごとたわごと」で迷ひであります。蓮如上人は大胆に、

「それ八万の法蔵をしるというとも、後世をしらざる人を愚者とす。たとひ一文不知の尼入道なりというとも、後世をしるを智者とすといへり。」

と言いきられました。

南無阿弥陀仏の名号は利剣であります。一切、迷ひの綱を切つて私を彼の安養世界に往生させて下さいます。

「六道にひく業障の綱を切る剣なりけり、弥陀の名号」

だから、弥陀の本願力に救われて行くことを信じさせられて不退の位についている者のみの生活が真実の生活で、その他の者の生活は、学者であるうが、大臣であるうが、僧侶であるうが、道徳家であるうが、皆迷ひの生活、虚偽の生活である。

又弥陀の救いを信じない宗教は、キリスト教も、回教も、皆、偽宗教である。

仏教でさえ弥陀の救いを除いたら単なる哲学であり、釈迦から弥陀の教えを除いたら釈迦は単なる哲学者である。

法然聖人は、一切経を五度読まれても、もし弥陀の本願を信じられねば、地獄行きである。かくて誰も弥陀の本願を信ぜず暮す者の生活は、ひつくるめて迷ひの生活、虚偽の生活、地獄行きの生活、愚者の生活である。

信心決定

「我なくば弥陀も正覚よもとらじ 我こそ弥陀の知識なりけり」(一休)
弥陀を泣かせたのも私である、弥陀を立たせたのも私である、弥陀に正覚をとらせたのも私である。

子の苦しみがなければ、その苦しみを泣く親の涙はない。

子の迷いから、頼みもせず、願いもせず、知りもせぬのに、親が生れた。

その親は、今度は先手かけて、頼みもせず、願いもせず、知りもせぬのに、向うから働きかけた。そうして「このまんま救う」という絶対救済の本願力、慈悲を子の魂のどん底にとどかせた。

子が信じたから救いが出来るのではない。出来た南無阿弥陀仏を、親の念力で子に知らせて安心さすのである。子が信じねば、子も迷うし、親も安心せぬのである。

私は唯、信じさせられたばかりである。信じまいともがいても信じねばならなかったのである。

私の往生をぬきにしては考えることの出来ない、私の往生浄土をたつた一つ目あてに、それだけ一つの目的に、五劫永劫かかった親である。その親を知っただけで私の往生は決定する。

本……………末

寒さが本で 衣服は末

病人が本で 医者は末

借銭が本で 親の辛苦は末

暗さが本で 電燈は末

私の迷いが本で 如来の正覚は末

衣服が出来たら寒さはない、医者が来たら病氣は治る、親が子の借銭故に辛苦して金持になれば、子の借銭は払ってくれる。電燈が点れば暗さはなくなる、南無阿弥陀仏、即ち如来の正覚を知らされたら、私の往生成仏は確かである。

牢獄の中へ一縷の光

真つ暗がりの牢獄の中へ入れられて、一度も光を見ない者は、光に憧れはしない。

けれども、もし、苦しい牢獄の内にも、一方の小さき窓から光がさしこめば、その光を慕って出たくてもがく。

人生という苦しい牢獄に囚われた者が、他の光の世界を知らねば、不幸なる眠れる生活が続けられよう。

けれども私の心眼は何時か牢獄の外から流れこむ光明を知らされた。

出づることの出来ぬ牢獄の内に坐して、小さい窓から青空を見た時、罪人は今更に光と空気と自然の有り難さを思い、自由の天地にあこがれるであろう。

久遠劫来の真暗な牢獄の内にはいた私が、初めて本当の光明にであつた時、魂の底から、出るに出来ない牢獄、迷いと罪悪と苦悩に閉じられた牢獄の嫌なこと、光明に満ちた自由の天地を慕うことを知らされました。

光明の主はお阿弥陀様でした。

この牢獄を打ち破って私を自由な天地に出したいために五劫永劫泣いてくれた真実の声に、私の全ては変わって来た。

親は泣いて泣いてくれたのです。

そうして私のこの惨めな囚われの姿を見つめ抱きしめて、本願力通れかし！

この涙のありつたけを知らせずにおくものか、

自由な天地につれ出さずにおくものか、

必ず救う、どうしても助ける。

親のやるせない本願力は私の胸の内にとどきました。

牢獄のままが親のふところでした。

ああ、この救いの大事実、

まことに、この完全に救われた大事実。

極楽蓮華台上に生まれさせて頂くこのよろこび。

人生生死の牢屋。

出ずることの出来ぬ厚い厚い鉄の壁。

断ち切ることの出来ぬ根強い恩愛の鎖。

逃げることの出来ぬ燃ゆる瞋恚の炎。

されど今、光明は流れて、一切群生海の上に救いの大事実が確かに明かに成就されたことを信じさせられる。

墓場の彼方に創造されてある三種莊嚴の浄土の世界。

その世界から流れ来る撰取の光明。

大地はかくて祝福された園林遊戯の、転迷開悟の道場であった。

けれどもまだ、地上の人たちは大方がその光を知らない。

そうして迷いを迷いと知らずに暗黒の中に何かを求めている。

闇は闇の力では晴れぬ。

世界十六億よ

ああ、淋しい！

万人が万人、牢獄ということさえ知らないで、牢獄を一層、固く丈夫にしているのだから。

ああ、世界中の人よ！

世界中の人よ！

その毎日の仕事は、そのままではみんな迷い事なのだぞ！

目を覚ましてくれよ！

その迷い故に泣いてくく久遠劫来待っている親があるぞ。

それだけを大胆に信じてくれ！

それだけでいいのだ！

信じさせたらあの親の任務は了るのだ。

信じた者は仏になる道に間違いなく出られるのだ。そうして一步も退転はないのだ、何をしていても。

牢獄を固める材料ばかりどうして造っていて気がつかぬのか。

皆自分の牢屋を固める材料なのに。

それがやめられない？

そうよ、やめられないままでいいのだ。

やめよ、と言うのではない。

本願力一つで、その牢屋の材料をそのままとつて、私の行くべき極上至美至善の御殿を作る材料にしようというのだ。

それでなくては、生きていられないではないか。

世界十六億よ！（私は私の声の小さいことに泣ける）

私は信じさせられた。

自信を持つて呼びかける。

皆、この声を、弥陀の呼び声を信じない者は生きていのではないぞ。

ころがつているのだ。

生存しているのです、生活しているのではないぞ！

濁水奔乱

急に雨が篠つくように降りました。風さえ加わって。

支流の水は急に増しました。

家を流し、石垣を壊し、田を河原にし、大小の橋を皆流してしまいました。

清らかに湧き出る井戸の水、それも水であります。

狂乱の河水も水であります。

真如法性の清水は如来のみ胸に湧き、怒涛狂乱の濁水は私の胸にさかまきます。

あの河の水は、そのままが海にそゞぎます。

けれども海は緑に澄んでいます。

「尽十方無碍光の 大悲大願の海水に

煩惱の衆流帰しぬれば 智慧のうしおに一味なり」

濁った支流は大事をおこしながら、太田川となつて、瀬戸の海に入ります。海はそのままをみんな自己にしてしまいます。私は煩惱の濁水さかまく河であります。如来は大悲大願の海水であります。

このまんま流れたとてくゞ澄みませる如来のうしおに変わりはありません。

このまんま、このまんま、智慧のうしおに一味とは有り難いではありませんか。

今日の新聞に、有島武郎さんが他所の奥さんの首をしめて情死した話が、出ていました。